

日本家庭科教育学会誌にうかがわれるごみ・掃除観

李 斯琴高娃*・乗本 秀樹

Views of Waste and Cleaning observed in Journal of the Japan Association of Home Economics Education

Siqingaowa LI and Hideki NORIMOTO

Abstract

We examined the back numbers of Journal of the Japan Association of Home Economics Education, and confirmed the possibility of introducing the methods of decision making and value development into the research of waste and cleaning actions.

要 旨

在这论文里, 研讨了刊登在日本家庭科教育学会志上的许多论文。而且, 确认了把意志决定或展开欲望(目标)的理论和针对垃圾或扫除的行为举动是能够结合的事情。

キーワード: ごみ、掃除、意思決定、欲求充足、目標展開、日本家庭科教育学会誌

1. はじめに

ごみや掃除をめぐる私たちの態度は、しばしばごちなく逃避的である。細かい分別は難しく面倒だ、教室に落ちているごみ類は拾えない、自室の掃除もおっくうだ、生ごみは見たくないし触りたくない。そんな気持ちになることが多いのではないだろうか。食物や衣服などの goods (良いもの) と異なって、ごみは bads (悪いもの) と認識された物である。そのような bads を処理する掃除はけっして嬉しいことや楽しいことではあるまい。

そうではあるのだが、生きているかぎり暮らしているかぎり、ごみは生じ掃除は行われる。そのようなごみや掃除に積極的に向かっていけないものか。ごみを扱ったりごみと向き合うことも人間らしい行為なのだ、という理解や感受性を保ち続けることができないものか。

「積極的」「人間らしい」という様相や条件はさまざまである。そのなかでも、ごみへの対応が、惰性や強迫によるのではなく、意思決定の過程を経ており〈計画→実行→統制→評価→調整〉というサイクルを伴うことは大切である。あるいは、ごみへの対応は必ずしも必要悪ではなく、多くの人々と共感したり自身を再発見するきっかけになるかもしれない。ごみ掃除も、〈生理的→安全→所属と愛→承認→自己実現〉という欲求(目標)の展開過程と無関係ではないと思われる¹⁾。

ごみを含む廃棄物への対応はいまや世界的な問題であり、わたしたちの生存環境を脅かす問題である。経済や行政の活動においても、いかにごみを減してゆくかという観点が不可欠になっている。もちろん、

* 三重大学大学院教育学研究科

私たちの日常生活においても、地球環境維持のための規範を受け入れなければならない。しかし、その受け入れは主体的であることが望ましい。できることならば、上にのべた積極性や人間らしさを保つものでありたいし、個人や家庭のマネジメント・サイクルや欲求（目標）展開過程と関連するものであってほしい。

このような願いすなわちごみと掃除の研究視点は、はたして妥当なのであろうか。このことを見当づけるために、本稿では、日本におけるごみと掃除の先行研究を調べておきたい²⁾。

2. 対象とする先行研究

(1) 資料について

ここでは、1985年から2004年に至る20年間に日本家庭科教育学会誌に掲載された全部の研究論文を対象とする。

日本家庭科教育学会誌は日本家庭科教育学会が編集・刊行する論文集であり、家庭科をめぐる授業実践、実態調査、文献研究あるいは教育動向について研究論文や資料が掲載される。本論文で日本家庭科教育学会誌に着目するのは、同誌が、児童・生徒を中心にではあるが、人びとの生き方や暮らし方に触れるからである。そのことによって、ごみ処理の膨大な量や複雑な社会システムなどの問題からいったん離れてではあるが、人間とごみのかかわり方について考える材料を得ることができるからである³⁾。

資料確保という便宜的な事情により20年間に限って考察するが、この期間に、日本では生活環境、教育制度ならびに家庭科教育制度に大きな変化が生じた。生活環境面では、いわゆるバブルという経済活況が展開し、その後には、バブル崩壊による長期の不景気が続いた。阪神淡路大震災を契機に、連帯や協働の生活基調が人々の間に定着し始めた。また、世界的な温暖化が懸念されるなかで、環境維持の努力の大切さが多くの人々に了解された。学校教育面ではゆとりが強調され、学校週五日制や「総合的な学習の時間」が始まった。家庭科教育においては、高等学校で男子に家庭科が必修として課されることになり、消費者教育や環境教育の内容が取り入れられた。そして、この20年間を通して日本におけるごみの1人当たり排出量はほぼ一定であったが、アジア諸国では増加しつつある⁴⁾。

(2) 研究論文の一覧

対象とされた論文総数は510編である。それらの1つひとつを李と乗本が読み、「ごみ」や「掃除」という言葉もしくはこれに類する言葉が含まれているかどうかを調べた。「類する言葉」と認めてよいかどうか迷う場合には、両名が協議して判定した。その結果、ごみや掃除もしくはこれらに類すると感じられる言葉を含む論文は113編(22.2%)であった。表1は、それらの一覧である。

また、ごみや掃除もしくはこれらに類すると感じられる言葉は54種類、登場する論文の数を考慮したのべでは275個である(表2を参照)。以下で「ごみ」や「掃除」という場合、これらの多様なことがらをイメージしたり前提している。

なお、これらの言葉を「もの／こと」「働きかけられる／働きかける」という2つ軸によって整理すると、図1のようである。ごみの種類を表す言葉(第1象限；働きかけられる－もの)と掃除などの行為を表すことば(第3象限；働きかける－こと)に集中する。逆に、第4象限(働きかける－もの)に位置する掃除の手段を表す言葉、ならびに第2象限(働きかけられる－こと)に位置する言葉は少ない⁵⁾。このように分布が偏った理由の1つは、筆者らが「ごみや掃除に類する言葉に注目した」ことにあると考えられる。

表1 日本家庭科教育学会誌に掲載されたごみをめぐる研究論文(1985年~2004年)

番号	著者名	題 目	(年) 巻号
			(1985年)
1	二宮喜美恵	高等学校家庭科におけるホームプロジェクトについて(第3報)一年間指導計画と指導内容の構想-	28巻1号
2	米川五郎他	児童・生徒における生活技術の実態と意識(第2報)-生活技術の意識-	28巻2号
3	二宮喜美恵	Future Homemakers of Americaに関する研究(第3報)-活動例および展開方法-	28巻3号
4	増田久子他	性格的特性を考慮したグループ学習の授業分析(第1報)-調理学習におけるグループ構成員の学習参加度-	28巻3号
			(1986年)
5	刀祢館尚子	家庭科における情意領域目標に対する一考察-「関心・態度」の分類例を通して-	29巻1号
6	野田満智子	棚橋源太郎による小学校家事科教育の模索	29巻1号
7	武藤八恵子他	岡山県における小学校家庭科教育の実態(第1報)	29巻3号
8	武藤八恵子他	岡山県における小学校家庭科教育の実態(第2報)	29巻3号
9	辻 禎子他	家庭におけるしつけの実態と問題点-幼児の基本的な生活習慣を中心として-	29巻3号
10	新福祐子他	学校教育としての家庭科への母親の期待-中学生の母親-	29巻3号
11	田部井恵美子他	形成的評価における児童の変容(第2報)-家庭科食物領域における技能について-	29巻3号
			(1987年)
12	奥村美代子	教員養成課程学生の意向調査からみた家庭科の教科課程の課題	30巻1号
13	舟木美保子他	調理実習における生徒の活動と学習の成立(第1報)-行動カテゴリーの設定と抽出グループの活動の分析-	30巻1号
14	舟木美保子他	調理実習における生徒の活動と学習の成立(第2報)-行動カテゴリーによる活動の分析と学習効果-	30巻1号
15	武藤八恵子他	岡山県における小学校家庭科教育の実態(第4報)	30巻2号
16	柳 昌子	家族の統合におよぼす協働の影響-「楽しい家庭」分析のために-	30巻2号
17	五島淑子	小学校家庭科の指導内容からみた教師のタイプについて	30巻3号
18	福澤素子他	小学校課程における消費者教育衣領域カリキュラムの検討	30巻3号
19	野田満智子	わが国における家事実習施設の系譜(第1報)-源流としての伝統的家事実習施設-	30巻3号
			(1988年)
20	田部井恵美子他	小学校における皮むきの技能指導	31巻1号
21	新垣都代子他	子どもの生活と親子の対応(第2報)-行動による親子のコミュニケーション-	31巻1号
22	高橋類子他	エプロンのカバーリング作用(第1報)-意識調査-	31巻1号
23	中村喜美子他	日常生活における生活技術の発達的变化(第1報)-必要度の意識-	31巻2号
24	増田久子他	高校家庭科男女共学に関する調査研究(第2報)-男子社会人によってみた家庭科履修の効果-	31巻3号
25	中村よし子他	日常生活における生活技術の発達的变化(第2報)-できる割合の実態および意識との関連-	31巻3号
26	矢沢恵美子他	消費者教育の効果的指導法の検討-「くらしのトランプかるた」を使って-	31巻3号
			(1989年)
27	鋤柄佐千子	オーストラリア、ニューサウスウェールズ州の中等教育における生活科学	32巻1号
28	鋤柄佐千子	オーストラリア、ニューサウスウェールズ州の中等教育における衣生活教育	32巻1号
29	永島利明	ソ連における労働科の教授要目の改訂	32巻1号
30	宇高順子他	小・中・高等学校における食物領域の学習内容構想	32巻1号
31	藤原康晴他	児童・生徒の家事に対する性別役割分業意識と家事手伝いととの関連性	32巻2号
32	多々納道子	衣生活管理能力の研究(第3報)-大学生の衣生活における性別役割意識と形成要因の実態-	32巻2号
33	夫馬佳代子他	家庭における被服教育(第1報)-親の衣生活態度が子に与える影響(家政系の学生の場合)-	32巻2号
34	鶴田敦子	中学校の食生活領域の指導内容と方法の一考察(I)-食生活に関する家事参加状況-	32巻2号
35	守谷敏子他	家庭科教育へのマイコン導入の可能性(第3報)-ソフトウェアの開発と課題-	32巻2号
36	舟橋久子	精神薄弱養護学校における調理教育の試み(第1報)-皮むき技能の3年間の変化-	32巻3号
37	柴 静子	廃食油の処理と再利用に関する調査研究(第1報)-佐賀市の主婦を対象とした実態調査から-	32巻3号
38	柴 静子	廃食油の処理と再利用に関する調査研究(第2報)-廃食油石けん作りの教材化について-	32巻3号
			(1990年)
39	田結庄順子	家事労働と生活的自立の教育(第3報)	33巻1号
40	田部井恵美子他	調理実習に対する中学生の意識と作業行動	33巻1号
41	舟木美保子他	児童の調理実習中の活動の実態(第1報)-調理実習中の学習経験と情報収集の仕方-	33巻1号
42	福留美奈子他	消費者教育の理念と家庭科教育(第1報)-現場実践にみる消費者教育の理念の検討-	33巻2号
43	多々納道子	衣生活管理能力の研究(第4報)-母親の性別役割意識と子どもの衣生活行動-	33巻2号
44	内野紀子他	学校における家庭科学習技能の開発と指導方法の改善(第1報)-「被服」領域の調査を通して-	33巻3号
45	鶴田敦子	中学校の食生活領域の指導内容と方法の一考察(第2報)-食生活領域指導内容の方向性-	33巻3号
46	鶴田敦子	中学校の食生活領域の指導内容と方法の一考察(第3報)-調理実習題材設定の視点-	33巻3号
			(1991年)
47	藤原康晴他	中学生の日常生活における省資源・省エネルギー活動の実態とその活動に関する意識	34巻1号
48	田部井恵美子他	児童、生徒の包丁の使用実態及び技能の変容	34巻1号
49	野田満智子	わが国における家事実習施設の系譜(第2報)-欧米留学者達による近代的家事実習施設導入への模索-	34巻2号
			(1992年)
50	中屋紀子	Our Share in The Homeの内容分析(第2報)-特に、「課題研究」に注目して-	35巻1号
51	池崎喜美恵	帰国子女の家庭科教育に関する調査研究(第1報)-在外中における家庭科の学習内容-	35巻2号
52	池崎喜美恵	帰国子女の家庭科教育に関する調査研究(第4報)-日本人学校における家庭科指導-	35巻3号
53	亀崎多佳子他	高校家庭科男女必修について-高校生の家庭生活意識の分析-	35巻3号
54	高部和子他	小学校における家庭科学習技能の開発と指導方法の改善(第3報)-「住居と家族」領域の調査を通して-	35巻3号
			(1993年)
55	柳 昌子	性別役割および家庭科に対する生徒の意識(第1報)-性別と学年別を中心として-	36巻1号
56	柳 昌子	性別役割および家庭科に対する生徒の意識(第2報)-家庭と学校の相互関係から-	36巻1号
57	伊藤圭子他	養護学校家庭科における調理実習室に関する検討(第2報)-施設、設備の実態分析-	36巻1号

番号	著者名	題 目	(年) 巻号
58	清野きみ他	最近5年間の家庭科教育研究の動向と問題	36巻2号
59	今村祥子他	環境教育としての消費者教育に関する諸考察(第1報) - 「消費者教育」概念と史的背景 -	36巻2号
60	今村祥子他	環境教育としての消費者教育に関する諸考察(第2報) - 高等学校家庭科教師の意識と「生態学的消費者教育」指針 -	36巻2号
61	山本紀久子他	生ごみの捨て方についての児童の理解	36巻3号 (1994年)
62	池崎喜美恵	帰国子女の家庭科教育に関する調査研究(第5報) - 保護者の家庭生活の実態と子供の養育 -	37巻1号
63	倉元綾子他	「地球にやさしい」態度を育てる教育(第1報) - エコロジーに関する実態調査 -	37巻2号
64	貴田康乃他	「地球にやさしい」態度を育てる教育(第2報) - 小学校家庭科における取り組み -	37巻2号
65	木村美智子他	家庭生活に由来する水質汚濁について(第1報) - 生活雑排水に関する意識調査と汚濁削減のための工夫 -	37巻2号
66	佐藤文子他	食生活に関する価値意識 - 小・中・高・大学生及び教師の実態調査から -	37巻3号
67	山田美由紀他	児童・生徒の生活力育成への要因(第1報) - 児童・生徒の住生活管理能力に関する実態から -	37巻3号 (1995年)
68	近藤 恵	家庭科教育における消費者教育研究の動向 - 学会誌分析を中心として -	38巻1号
69	野田満智子	アメリカにおける家事実習施設の系譜(第3報) - ニューディール期から第二次世界大戦終了まで -	38巻2号
70	矢野由起	家庭科における食生活領域の学習指導(第1報) - 大学生の食事選択力と知識、技能、関心との関連 -	38巻2号
71	矢野由起	家庭科における食生活領域の学習指導(第2報) - 食事作りの頻度別にみた知識、技能、関心 -	38巻2号
72	池崎喜美恵	日本人学校の保護者からみた家庭科教育(1) - 家庭生活観と養育態度を中心として -	38巻3号
73	馬路泰蔵	食事作りを課題とする教員養成学部学生のレポートの解析(第1報) - 文意のカテゴリー化によるレポート内容の解析 -	38巻3号
74	馬路泰蔵	食事作りを課題とする教員養成学部学生のレポートの解析(第2報) - 数量化理論3類による記述内容の相互関連の解析と学生の位置付け -	38巻3号
75	久保加津代	1947年から1957年の中学校家庭科の教科書にみる家庭生活(第2報) - 家事労働 -	38巻3号 (1996年)
76	荒井紀子他	児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因(第1報) - 生活活動の実態と高齢者観との関連 -	39巻1号
77	小西史子他	食料費からみた家庭経済の新しい指導法の視点(第1報) - 食品中の栄養成分の量と価格との関連にたつて -	39巻1号
78	青木幸子他	家庭科における消費者教育の進展と今後の課題	39巻2号
79	鶴田敦子他	男女共学家庭科の履修と高校生の意識(第2報) - 生活主権者意識と家庭科観 -	39巻2号
80	永原朗子他	父母の家庭科観(第1報) - 学習指導要領改訂後における山口県の小・中・高校生の父母の場合 -	39巻3号
81	山田美由紀他	児童・生徒の生活力育成への要因(第2報) - 児童・生徒の住生活管理能力とゴミ問題に対する認識・行動との関連 -	39巻3号 (1997年)
82	中井昌子他	家庭科の授業改善のための評価法の研究 - 小学生の授業に対する態度尺度の作成を通して -	40巻1号
83	岡村美乃里他	小・中・高等学校における体系的な衣生活教育のあり方に関する研究(1) - 衣服購入および衣服整理についての調査から -	40巻1号
84	金子佳代子他	厨房排水の汚濁削減方法の検討 - ごみ受け用水切り紙等の使用効果およびCOD簡易測定法について -	40巻2号
85	浜島京子他	新指導要領実施後における高校家庭科教員の意識の変化	40巻3号
86	福田恵子	男子高校生をもつ父母の家庭科観とその影響要因	40巻3号 (1998年)
87	桑畑美沙子	家庭科における地域の食文化の教材化(第1報) - 熊本県家庭科サークルにおける食文化にかかわる実践事例の分析 -	41巻1号
88	岡村美乃里他	小・中・高等学校における体系的な衣生活教育に関する研究(2) - 衣服の補修・廃棄と衣生活領域への関心についての調査から -	41巻1号
89	関川千尋他	学校教育における家庭経済領域の授業開発に関する研究 - その1、消費行動のシミュレーション授業「ホームパーティーを開こう」の開発 -	41巻1号
90	大路雅子他	雑誌掲載事例にみる中学・高校生の乳幼児体験学習の効果と問題点	41巻1号
91	鶴田敦子他	男女共学家庭科の実施と教師の意識(第2報) - 生活主権者意識と家庭科観をめぐって -	41巻2号
92	飯塚和子他	中学校技術・家庭科の選択履修制が高等学校家庭科教育に及ぼす影響	41巻2号
93	山岸雅子他	高等学校「住居領域」の教育内容・方法の検討(第3報) - 生徒の変化からみる授業案の検討 -	41巻2号
94	岡田みゆき	食事中の会話の教育的意義 - 父子の会話の歴史的変遷 -	41巻3号
95	桑畑美沙子	家庭科における地域の食文化の教材化(第2報) 熊本県家庭科サークルにおける地域の食文化にかかわる実践事例の分析	41巻4号 (1999年)
96	野中美津枝他	知的障害者との交流体験学習導入による福祉意識の形成 - 高校家庭科における男子生徒を対象とした実践を通して -	42巻1号
97	川辺淳子	高等学校家庭科における洗濯実験教材の開発 - 洗濯時の「再汚染」の視点から -	42巻3号 (2000年)
98	中西雪夫	家庭科の学習内容の実践化の定着時期 - 学習内容の家庭生活における実践率の変化 -	42巻4号
99	田上和子他	高等学校家庭科の衣生活領域着方指導に関する研究 - 被服実験教材(通気性簡便測定装置)導入による授業実践 -	42巻4号
100	内野紀子他	小学校学習指導要領実施の評価(その1) : 子どもの意識と態度形成	43巻3号
101	松葉口玲子	家庭科の教科書における環境教育および消費者教育に関する内容の検討	43巻3号 (2001年)
102	佐藤 園	家庭科の本質(第1報) - 平成元年版学習指導要領家庭科における家庭的資質育成教育 -	44巻1号
103	岡田みゆき	小学校における家庭生活指導について - 「家庭科」と家庭生活指導とのかかわり -	44巻3号 (2002年)
104	中西雪夫	男女共通必修家庭科の実施が高校生の家族・保育に関する意識に与えた影響(第2報) - 性別役割分業観・家事参加の変化 -	44巻4号
105	大曲美佐子他	環境保全的消費行動における活性化要因としてのライフスキルの学習効果 - パス解析による因果モデルの評価 -	45巻1号
106	渡瀬典子	学校家庭クラブ活動における「奉仕的活動」の変遷 - 『FHJ』誌の分析から -	45巻3号 (2003年)
107	志村結美他	家庭科における自己実現と経済的自立に関する教育内容の探究 - 高校生の認識と実態の視点から -	46巻1号
108	高木幸子他	技術・家庭(家庭分野)において住まい方を考えさせるカリキュラムの開発	46巻1号 (2004年)
109	信清亜希子他	普通教育における家庭科の教育内容構成 - アメリカの「ティーン・ガイド」とわが国の家庭経営学習に関する教科書記述の構造分析を中心として -	46巻4号
110	近藤清華他	大学における家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題(第2報) - シラバス分析から -	47巻1号
111	妹尾理子他	高等学校家庭科における「消費生活と環境」の授業開発(第1報) - 「資源・環境」に焦点を当てた授業づくりの基本的枠組みと構造 -	47巻1号
112	井元りえ他	高等学校家庭科における「消費生活と環境」の授業開発(第2報) - 授業実践およびその検討 -	47巻1号
113	田中陽子	裁縫教授書の洋裁教育 - 1930年代の小学校および1940年代の国民学校 -	47巻2号

[5 4 種類 (のべ 2 7 5 個)]

働きかけられる		働きかける	
<p>[6 (1 4)]</p> <p>廃棄率 7 ゴミ問題 2 廃棄量 1 リサイクル法 2 むだ 1 廃棄物処理問題 1</p>	<p>[1 8 (9 1)]</p> <p>ごみ(ゴミ) 4 1 不用品(不要な物、いらぬ物、など) 1 4 廃棄物(廃品、生活廃棄物) 1 1 廃食油(廃油、廃食用油) 7 生ごみ(なまごみ、なまゴミ) 3 粗大ゴミ 2 紙おむつ 2 燃えるゴミ 1 燃えないゴミ 1 紙くず 1 プラスチックごみ 1 資源ゴミ 1 塵芥 1 あきびん 1 あき箱 1 空缶 1 不要な布 1 無駄な容器 1</p>		
こと	もの		
<p>掃除(清掃、そうじ) 4 7 後片付け(あと片づけ、など) 2 2 整理・整頓(整理整とん、など) 1 8 廃棄 1 6 リサイクル 1 3 省資源 6 省エネルギー 5 片づけ(かたづけ、かたづける) 4 リフォーム 4 処理 3 後始末 2 再利用 2 処分 2 始末 2 分別 2 大掃除 1 ゴミ捨て 1 廃品回収 1 節約利用 1 ゴミ箱づくり 1 紙の無駄使い 1 3R 1 [2 2 (1 5 5)]</p>	<p>電気掃除機(掃除機) 4 ごみ箱(ゴミ箱) 4 清掃用具 2 ちりとり(チリトリ) 2 ほうき 1 廃棄バケツ 1 ゴミ受け器 1</p> <p style="text-align: right;">[8 (1 5)]</p>		

図 1 日本家庭科教育学会誌に見出されるごみと掃除をめぐる言葉

3. ごみと掃除をめぐる諸視点

(1) ごみや掃除を主題とする論文

諸論文においてごみや掃除もしくはこれらに類する言葉が用いられる経過をみると、3つの場合がある。

- A；当初からごみや掃除などを研究の主題としており、必然性をもってごみや掃除に類する言葉が論文中で使われる場合。
- B；ごみや掃除とは異なる主題であるが、研究が進むうちにごみや掃除に類する事象が着目されこれらの言葉が用いられる場合。
- C；ごみや掃除とは異なる関心のもとに展開されるにあたって、いわば機械的・形式的にごみや掃除に関する言葉が用いられる場合。

ごみや掃除への研究関心は、Aにおいて最も高く、BまたはCがこれに次ぐと考えられる。

表2でA～Cの分布状況を見ると、Cが大半を占める。そして、多くの場合に、アンケート調査の項目や選択肢のなかにゴミや掃除に関するところから取り入れられる。“実際の生活で必ず発生し、家庭科教科書などにも必ず登場する。そのようなごみや掃除を欠くことはできない。”という事情からごみや掃除があらかじめ取り入れられることになったのではないかと推察される。その意味で、ごみや掃除に積極的、直接的に関心が向けられることは少ない。

そのようななかで、Aに属する論文はどのような内容か。以下に紹介しよう(括弧内は研究論文番号)。

- ・消費者教育を小学校の教育活動にとり入れる方法の1つとして、「あき箱」「あきびん」「なまゴミ」「粗大ごみ」などの語句が書かれた「トランプかるた」ゲームに注目し、子供の家庭生活にもたらす効果を調べる。[26]
- ・中学生の日常生活における省資源・省エネルギー活動の実態と意識について、廃棄物回収の動機(規範意識)にもふれながら調査する。[47]
- ・小学6年生を対象に、台所で生じる生ゴミの廃棄に使用する2種類の水切り袋(和紙製とポリ

エチレン製)をとりあげて、「燃えるごみ」と「燃えないごみ」のどちらを選ぶかの判断について調査する。[61]

- ・住生活管理能力育成のよりどころとするために、小・中学生における自室の掃除、自室以外の掃除、掃除道具の使い方の状況について調査する。[67]
- ・小・中学生における、家庭でのごみ量や分別方法の理解ならびにゴミの増加と減量に関する認識や行動を調査し、住生活管理能力との関連性をとらえる。[81]
- ・台所排水の汚濁低減に対する、水切りろ紙使用およびふきとりの効果を検討する。[84]
- ・小中高一貫の衣生活教育を提案するために、小学生・中学生・高校生・大学生の衣服の製作、補修、廃棄に対する意識を調査する。[88]
- ・廃品(ペットボトルやトレイ)を実験器具として用いることにより、被服材料の通気性を測定する。[99]
- ・「消費生活と環境」に関する学習指導要領、教科書、実践報告での記述を整理したうえで、高等学校家庭科の授業を構想する。[111]
- ・上記授業の有効性を検討する。[112]

10編のうちには、研究論文[61][81]のようにごみ処理技術利用をめぐる論文がある。[26]や[99]も、授業展開に新しい技術ないし工夫を取り入れる論文である。他方で、研究論文[67]のように生活する主体における価値観の展開を重視するものもある。

- ・「児童・生徒は中学生段階においても資源節約や再利用に関する行動を『規則として』『習慣として』いわば受動的に行っている傾向があるので、これを自分自身の価値観に基づいた主体的、積極的な動機に転換することが…生活力につながる。例えば…『清潔で気持ちよく生活できるように』『住みよい』『快適で安全』という価値観を児童・生徒自身の要求として気づかせることが必要であろう。」(37巻3号、pp.23-24)

研究論文[111]においても、「価値観形成—地球規模の環境問題とのかかわりをふまえて自己の生き方・ライフスタイルを見直す」(47巻1号、p.23)と言われ、価値観が強調される。地球環境維持のための規範が主体的に受容されるためには(1.)、外から与えられたり求められる価値観ではなく、「自身の要求として気づく」([67])性質のものであることが望まれる。

(2) ごみと掃除への多様な視点

表2では、それぞれの研究論文の内容をもとに、ごみや掃除の研究にとって示唆的だと思われる視点や知見がワンポイントで記されている。ただし、その記述は、それぞれの論文の全体的な趣旨を必ずしもバランスよく言い表すものではない。また、ごみや掃除について直接的に言及するのではなく、“論文中で述べられていることがらごみや掃除にもあてはまるであろう”と筆者が類推する場合も多い。

これらの視点や知見は、4通りに区分することができる。

W；ごみや掃除が価値観や生活目標などとむすびつくことを示唆するもの。

X；ごみや掃除をめぐる子どもや家族の生活や生活意識の現状を示すもの。

Y；ごみや掃除をめぐる授業、カリキュラムの実態やあり方を示すもの。

Z；ごみや掃除を支える環境(技術、制度)を示すもの。

日本家庭科教育学会誌の性質上XとYが主であるが、WやZに言及されることもある。

そして、本論文の主題に関連するのはWであり、Wに分類される10編の論文はさまざまな視点や知見を示してくれる。前項で述べた[67]と[111]以外の研究論文について、紹介しておこう(括弧内は研究論文番号)。

- ・「必要な物と不必要な物を区別してかたづける」ことは、「総合的な判断を必要とする技術」

表2 日本家庭科教育学会誌・研究論文におけるごみ・掃除への接近方法

番号	キーワード	設定(主な方法)	ごみ・掃除に関する視点や知見
1 2 3 4	ごみ、清掃、省資源 不必要な物、かたづける 清掃 片づけ	B(文献、アンケート) C(アンケート) C(文献) C(行動記録)	ホームプロジェクトによって清掃やゴミ処理を学ぶ。Y 必要な物と不要な物を区別して片付けることは、総合的な判断を要する生活技術。W 関心確認→目標設定→計画立案→実践→評価が、集団活動の清掃にも適用される。W 調理実習作業種類別参加率をみると、片付けへの参加率は高くない。X
5 6	ゴミ、清掃 後片付け、掃除	C(文献) C(文献)	「関心」や「態度」を細分することによって、ごみの処理や清掃の評価視点が示される。Y 【後片付けや掃除で家事労働合理化度が判断される。後片付けや掃除等の家事は、節約秩序整頓勤勉等の婦徳の養成だった(20世紀初頭)。】
7 8 9 10 11	ゴミ ゴミ 後始末、ごみ そうじ、ちりとり、ほうき 廃棄率	C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) B(技能テスト)	授業改善のために調査手法(住居・教室内のごみ種類調査等)を導入しているか。Y 同上Y 発達段階に応じたしつけ。幼児に可能な手伝いとしてのおやつ後始末とごみ捨て。Y 学校や家庭で、場所や汚れに応じた掃除のしかた、道具の使い方を教える。Y 【皮むき技能の1要素としての廃棄率。】
12 13 14 15 16 17 18 19	そうじ 後始末、廃棄物、ごみ 廃棄物 廃棄バケツ、清掃用具、電気掃除機 掃除、大掃除、あと片づけ 清掃、整理整頓 不必要なもの、整理・整頓 掃除	B(自由記入調査) B(行動記録) B(行動記録、アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) B(アンケート) C(文献)	「生活指導」という家庭科教育授業科目例に、掃除指導の仕方がある。Y 調理実習(ごみ捨てを含む)の行動は直接経験(自ら行う)と間接経験(見る)から成る。Y 同上。廃棄物処理行動の時間は少なく、個人差も少ない。X 【家庭科室施設・設備の整備・使用・管理は、教員の話し合いによるか慣習によるか。】 掃除が家庭の雰囲気(活気、自由、まとまり、楽しい、思いやり、公平、など)と結びつく。W 清掃、整理・整頓に重点をおく教師。Y 子どもの衣生活関心をふまえたカリキュラムに、日常着の整理・整頓が含まれる。Y 【昔(江戸時代)の女子のための訓育の光景。】
20 21 22 23 24 25 26	廃棄率 整理整頓、掃除、後片付け 後かたづけ、掃除 掃除、整理整頓、不要物、ゴミ かたづけ、そうじ 掃除、整理整頓、不要物、ゴミ あき箱、あきびん、なまゴミ、粗大ごみ、リサイクル	B(アンケート) B(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) A(アンケート)	【皮むき技能の水準を表す廃棄率。】 自室の整理整頓・掃除は子供が責任を持って行う、食後の片付けは親子がともに行う。X 【エプロンを着て行う仕事として食後の後片付け、掃除。】 生活諸技術に関する必要度に関する意識が、年齢によって、性別によって異なる。X 家庭科で学んだ経験は家事の実践度を高める。X 生活技術は成長とともに発達する。掃除や整理整頓は中学生の段階で修得している。X かるた遊びする前後で、小学生のあき箱処理などに差がみられる。Y
27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38	清掃、廃棄 リフォーム 掃除機、チリトリ、清掃 ゴミ そうじ、ゴミ 処分 廃棄 後かたづけ 廃棄量 廃棄率 廃食油、ゴミ箱、リサイクル 廃食油、ゴミ箱	C(文献) C(文献) C(文献) C(文献) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) B(実践観察記録) C(アンケート) C(アンケート)	外国(オーストラリア)の生活科学でも、清掃や廃棄がとりあげられている。Y 外国(オーストラリア)の衣生活教育でも、リフォームがとりあげられている。Y 外国(ソ連)の「労働科」(「技術・家庭」に相当)でも、掃除機、ちりとり、清掃が学ばれる。Y 社会的問題・生活問題としてのごみを、食物領域の学習構想に取り入れる。Y ごみの始末やそうじは男女ともが行えばよい、と考える傾向がある。X 被服処分方法の学習機会になっているのは、親による子の「しつけ」であることが多い。X 古い衣服の処理法については、親子間に高い相関がある。X 後片付けは家事労働の本質理解に重要。片付けの内容と学年発達度を結びつける。X C(文献) 食物の廃棄量についてのマイコンソフトウェアがある。Y 技能が向上すると廃棄率が減り、ごみが減る(干柿作り等の実践)。Z 廃食油処理(石けん作り)が地域社会の再生に結びつく。Z 廃食油の処理法と石けん作りを家庭科に取り入れることができる。Y
39 40 41 42 43	そうじ、ゴミ、整理・整頓 後片づけ、いらぬもの、ごみ 廃棄物、ゴミ ゴミ、整理整頓 処分	C(アンケート) C(アンケート) C(行動記録) B(文献) C(アンケート)	父母の児童期と子供の家事参加率の比較。親による子供への家事責任の求め方。X 実習におけるごみの処理は、味付けなどと異なり、最も意欲が示されない作業。Y 調理行動の1つであるごみの始末に関する情報収集回数調べ(考察はない)。X 社会的関連を自覚しつつ自己の価値観・生活管理観を築くことが、消費者教育に大切。W 衣服の保管・処分には、母親から女兒への影響が強い。民主的なしつけ観をもつ者が、衣生活の実践をよりよく行っている。X
44 45 46	むだ 生活廃棄物 後片づけ	C(アンケート) B(文献) B(文献)	「むだのないよう気をつける」(衣服製作)は指導者が強く意識し、児童も関心をもつ。X 家庭生活の内と外(社会環境)で、生活廃棄物が考えられるべき。Y 調理実習に時間的制約があり(「片付け」がある)、家庭生活の認識まで導くのが困難。Y
47 48 49	廃棄物、空缶、省資源 後片付け、廃棄率 掃除、廃品、塵埃	A(アンケート) B(アンケート) C(文献)	空缶回収や節電には、これら活動への好意度と親・先生・人々の期待が影響する。X むく技能目安の1つとして、廃棄率。(手つきがよくなると廃棄率が上昇する傾向。)Y 【高等女学校には掃除の実習があった。実習教室の設備等配置図が示される。】
50	清掃	B(文献)	「合理的な清掃のしかたについて研究しよう」は、解決方法が予め見えている研究課題であり、生活パターンや家事方法の押しつけた。Y
51 52 53 54	掃除、ごみの始末 掃除、ごみ、不要品、整理・整頓 掃除、整理・整頓、清掃 ごみ、掃除、整理・整頓	B(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート)	日本人学校・現地校の小学生の30%が、掃除等の学習をした。Y 日本人学校(小学校)で掃除等の指導をした教員は、どちらかといえば少ない。Y 部屋の整理・整頓・清掃ができることは、生活に必要な技術だ。Z 住居領域25技能のうち6がごみ・掃除関連。性別・学力により技能活用度に差がある。X
55 56 57 58 59 60 61	後かたづけ、掃除、なまごみ 後かたづけ、掃除 掃除、ゴミ処理 廃棄率 廃棄、廃棄物処理問題 ごみ、廃棄、省資源・省エネルギー、紙おむつ、リサイクル、廃油 生ごみ、廃棄プラスチックごみ、紙くず、燃えるごみ、燃えないごみ、紙おむつ	C(アンケート) C(アンケート) C(アンケート) C(文献) B(文献) B(アンケート) A(アンケート)	【ごみ捨てが恥ずかしい】「台所・便所・居間の掃除をする」に、男女・学年差がある。X 掃除を含む家事への参加が、家庭科や家庭科授業の意識に積極さをもたらす。Y 【実習室・実習設備に求められる条件(掃除しやすい、など)。】 【キーワードとして「廃棄率」が3回登場することが紹介されている。】 廃棄物処理がとりあげられるのは、消費者教育にエコロジカルな視点が入った証拠。Y 「個人の価値体系」や「環境を改善する消費生活様式に向けての意思決定過程」という視点が示される。W ごみ処理用品の材質表示(情報提供)によっては、捨て方にとまどいや錯誤が生じる。Z

番号	キ ー ワ ー ド	設定 (主な方法)	ごみ・掃除に関する視点や知見
62	掃除、ゴミ、後かたづけ、不必要な物	C (アンケート)	海外でのゴミ・掃除体験と帰国後の比較。X 「地球をいじめている感覚」の自己チェック。環境教育として整理・整頓が重視される。Y 地球破壊をもたらすゴミ増大や廃油。そうさせない環境教育授業。Y 川の汚れが、適切な道具 (ゴミ受け器、三角コーナー) によって防げる。Z
63	廃油、ゴミ箱、ゴミ、無駄な容器、紙の無駄使い、整理・整頓	B (アンケート)	
64	ゴミ、廃油	B (授業と効果調査)	
65	廃食油、ゴミ、ゴミ受け器、調理くず	B (アンケート)	
66	廃棄	C (アンケート)	
67	不用品、ゴミ、廃棄物、整理・整頓、清掃、掃除	A (アンケート)	概して、自身に関係することに価値を置き広い視野 (廃棄処理など) が持てない。W 自身の価値観 (清潔で気持ちいい、住みよい、快適) にもとづく積極的・主体的な動機を重視する。W
68	省資源・省エネルギー、ゴミ、廃棄物	B (文献)	1990年代に始まる環境問題への家庭的アプローチはすべて住居領域のテーマ。購買行動のあり方を、環境問題との相互作用にまで視野を広げるべき。Y 【1930-40年代のアメリカの家庭科実習室の図面に、ゴミ箱が示されている。】 食品の廃棄率を知っていることは、食物のとり方の「知識」をもってのこと。Y 同上。食に関する知識、技能、関心のいずれにおいても、男子は女子より低い。X 部屋の掃除、食後の片付け、ゴミの始末。現地の慣習に感化されて、子供がよく手伝う。X 男女・専攻間での記述 (意識ならびに課題提示) のしかたにちがいがあ。X 食生活に関する社会的問題を認識するためには、食生活に関する知識・能力が必要。Y 庭掃除など、1947-57年に「話し合ったうえで男子」分担から女子分担へと変わった。Z
69	ゴミ箱、後かたづけ	C (文献)	
70	廃棄率	C (アンケート)	
71	廃棄率	C (アンケート)	
72	掃除、後かたづけ、ごみ、始末	C (アンケート)	
73	後かたづけ、ゴミ問題、リサイクル	B (レポート分析)	
74	ゴミ、リサイクル、後片付け	B (レポート分析)	
75	そうじ、電気掃除機	B (文献)	
76	廃品回収、掃除	C (アンケート)	自宅内外掃除や廃品回収 (地域活動参加) は、高齢者への親しみや関心を増す。W 【食品データの注記として「廃棄部分を含む」が用いられている。】 ごみは、「消費者の生活理念と意思決定」ではなく「環境保全と消費生活」に置かれる。Y リサイクルという社会活動への参加意識。「生活主権者」概念にもとづき、男女の比較。Y 住居領域の環境教育で、「廃棄物の処理」「ごみや不用品の処理」を十分検討すべき。Y 自室掃除、自室以外掃除、室内温度調節、学習時照明ができると、ごみ認識度も高い。Y
77	廃棄	C (シミュレーション)	
78	リサイクル、ごみ、不用品	C (文献)	
79	リサイクル	C (アンケート)	
80	廃棄物の処理、ごみ、不用品の処理	C (アンケート)	
81	ゴミ、掃除、リサイクル	A (アンケート)	
82	あとかたづけ、不用品、整理・整頓、そうじ	B (アンケート)	「不要品が活用できる」「整理・整頓や掃除の仕方がわかる」ので家庭科は生活に生かされると、子どもが言う。Y 【「衣服の整理・廃棄」という調査項目はあるが、言及なし】 る紙依存ではなく、食べ残しを「ごみとして」「こまめに」捨てることにより汚濁が減る。Z 男女共学化で多くの題材に指導上の不安 (題材の教育価値、男女の能力や技術差など)。Y 「実践をとまなわれないタテマエ的な男女平等主義」。そうじにもその傾向。X
83	廃棄	C (アンケート)	
84	廃食用油、廃棄、ごみ	A (商品実験)	
85	リフォーム	C (アンケート)	
86	掃除、不用物、ごみ	C (アンケート)	
87	後片づけ、廃棄、ゴミ	B (文献)	食生活の内容だけでなく、後片付けや残さい廃棄やごみ処理も食文化の対象。Y 学年が進むほど、着用しない衣服を「しまったまま」にしたり「捨てる」者が多い。X C (構想提案) 経済理論を実習で理解する。「後片付け」はパーティの「準備時間」に位置づけられる。Y 1947年学習指導要領 (試案) には、小学5年に「掃除の学習」があった。Z 【「リサイクル」を、ボランティアの活動例を示すためにだけに用いている。】 「生産から廃棄までを見通すために製作経験が必要か」という議論が必要。Y ごみと掃除は、家族や個人 (高齢者) の住空間ではなく、地域づくりに位置づけられる。Y 【かつて「衰れた父親 (夫)」のたとえとして用いられたことが紹介される。】 教材は、料理、加工食品、原材料食品だけではない。ごみも教材だ。Y
88	廃棄、リフォーム、リサイクル	A (アンケート)	
89	後片付け	C (アンケート)	
90	掃除	C (文献)	
91	リサイクル	C (アンケート)	
92	廃棄	B (アンケート)	
93	ごみ、掃除	C (アンケート)	
94	粗大ゴミ	B (文献)	
95	ゴミ、廃棄	C (文献)	
96	ゴミ問題	C (授業と感想分析)	環境保全 (ボランティア活動) のビデオ学習。テーマはごみ問題。Y 被服実験教材導入が、教材のムダなど、省資源・省エネルギーに反することがある。Y
97	省資源・省エネルギー	B (アンケート)	
98	掃除、ゴミ	C (アンケート)	ごみ・掃除学習について、授業後の定着状況を調べる。Y ペットボトルなどを被服実験器具として有効に使う。Y 不要品処理、整理整頓などの学習が必要か、どんな学習方法がよいか、どんな学習活動 (見学、話し合い) がよいかを尋ねる。X 教科書における、ごみ・掃除関係の各項目に関する頁数に注目。Y
99	廃品、リサイクル	A (授業と感想分析)	
100	不用品、整理・整頓、掃除、ごみ、片づけ、分別	C (アンケート)	
101	不要品、ごみ、整理・整頓、リフォーム、3R、あと片付け、不要な布、省資源・省エネルギー、廃物	C (文献)	
102	後かたづけ、再利用、整理・整頓、掃除	C (文献)	
103	後かたづけ、整理整頓、掃除、清掃用具	B (文献)	住まいの掃除は、「家庭生活に関する実践的・体験的な活動」のうちの「住生活のために仕事をしよう」に置かれる。Y 昭和26年度教科書では、整理整頓と掃除では「理解」が、「清掃用具の製作・修理」では「技能」が重視される。Z
104	後片付け、掃除、ごみ捨て	C (アンケート)	家庭科を学習することにより、男子高校生が家事参加する頻度が増えた。X ライフスキル学習によって、知識・態度・自尊心や家人の態度や友人への態度が、環境保全的消費行動実現に効果的に作用する。W 学校家庭クラブの活動 (清掃、ゴミ箱づくりを含む) 場が校内から校外へ広がった。Y
105	リサイクル、ゴミ、資源ゴミ	C (アンケート、ワークシート)	
106	清掃、ごみ箱づくり	B (文献)	自室の掃除は自分であることが、生活的自立ひいては自己実現の要素。W 授業前に較べて授業後には、「快適な住居」「安全な住居」に関する語彙が多くなる。Y
107	掃除	C (アンケート)	
108	ごみ分別、掃除、整理整頓、掃除機	B (連想語彙の記述)	『ティーン・ガイド』は、自身についての学習から始まる。X 衣生活管理 (再利用、廃棄を含む) は、大学授業でよく扱われる。Y 価値観形成を目標とする「消費生活と環境」授業を、構想する。W 上記授業の効果が、知識と理解の深化、自分の生活の批判的考察などに見出された。Y 残り切れ等の利用 (1940年代) は、伝統尊重を志向する節約利用訓練だった。Z
109	リサイクル	B (文献)	
110	再利用、廃棄	B (シラバス調査)	
111	廃棄、リサイクル法、ごみ	A (文献、授業案提示)	
112	リサイクル法、ゴミ、省エネ、いらぬもの	A (授業観察、アンケート)	
113	節約利用	B (文献)	

(注) ①A・B・C、W・X・Y・Zについては本文を参照のこと。②【】は、本論文の主題と無関係であることを示す。

である、という (28 巻 2 号、pp. 10-12)。⇔このことは、片づけが惰性的な行為やたんなる身体労働でないこと、生活場の展開を見通したうえで意思決定する、その後に片付けることができることを意味する。[2]

- 「関心を確認する→目標を設定する→計画を立案する→実践する→評価する」などの過程が集団活動の展開に適用される、という (28 巻 3 号、pp. 3-4)。⇔共同作業やイベントとして掃除を行う場合には、関心の確認から始まるマネジメント・サイクルをふまえた展開は有効である。[3]

- 家事に家族ぐるみで参加する家族は、そうでない家族に較べて、「楽しい」「自由がある」「活気がある」「けじめがある」「思い遣りがある」「まとまりがある」「協力的である」「公平さがある」雰囲気によりよく感じている、という (30 巻 2 号、pp. 53-54)。⇔このことは、掃除をも含む家事が、所属欲求や承認欲求をよりよく充足し意思決定がより行われやすい環境を醸成することを示唆する。[16]

- 「社会的関連」を自覚しつつ自己の「価値観」や「生活経営者としての自覚」を形成することが消費者教育に大切だ、という (33 巻 2 号、pp. 5-6)。⇔ごみ問題に対して、個人や家族あるいは地域で対応可能なことがらを見出し合意形成をはかりながら、それぞれの計画に織り込む。ごみ対応について個人や家族あるいは地域で気づいた対応方法があれば、社会に提案してゆく。こうしたことの積み重ねのなかで、ごみをめぐる自己の価値観・生活管理観が形成される。[42]

- 小学生から大学生までに行った食生活調査によると、概して、栄養や楽しさなどの「自分自身に直接関係すること」に価値を置く一方で、「廃棄処理」など「広い視野」を要することからは価値を置かない、という (37 巻 3 号、p. 21)。⇔「自分自身に直接関係すること」に含まれる多様な価値 (欲求充足、目標達成) を吟味すること、あるいは「広い視野」を形成するためには上述 ([42]) の視点も大切であろう。[66]

- 「生活自立」(自宅内外掃除を含む) や「地域活動への参加」(廃品回収を含む) が高いほど、高齢者への親しみや関心が高い、という (39 巻 1 号、pp. 3-6)。⇔〈所属と愛〉の欲求充足 (目標達成) を展望するうえで参考にされてよいであろう。[76]

- 「批判的思考・意思決定スキル」学習は直接的に、また「知識・態度・自尊心」や「家の人の態度や友人への態度」への影響を介して間接的に環境保全的消費行動実現に効果的に作用する、という (45 巻 1 号、p. 4,12)。⇔意思決定に支えられるごみ対応と掃除のあり方をめざすうえで、意思決定手法学習をも含むスキル学習は重要である。[105]

- 「自分の部屋の掃除は自分でする」ことは、「生活的自立」ひいては「自己実現」(「自分の中に潜在的にある才能、能力、可能性を自分で発見し、発展させ、最大限に生かし、それを生活の中で主体的に現実化していくこと。また、自立 (律) 性と共同社会感情等を合わせもつこと) に寄与することが、因子分析によって示される (46 巻 1 号、p.15)。⇔掃除という行為のなかにも、「能力を自分で発見」する、「主体的に現実化」する、あるいは「共同社会感情」をもつ機会がある。掃除が〈自己実現〉や〈所属〉の欲求 (目標) とかかわることを意味する。[107]

4. むすびにかえて

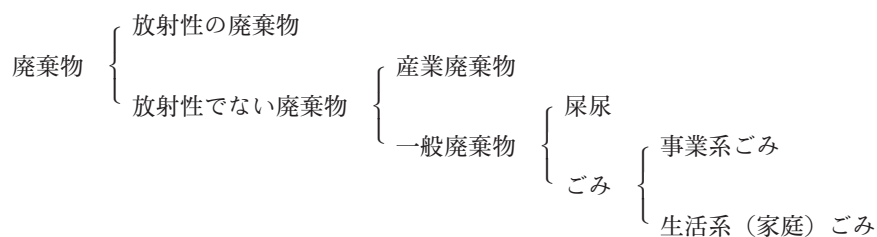
ごみや掃除をめぐる活動に意思決定や欲求 (目標) 展開の考え方を結びつけることが、妥当かどうか。この問いに答えるために、本論文では日本家庭科教育学会誌に掲載された多くの研究論文を読んだ。そ

の結果、前節(2)で紹介した所見を中心に、上記の問いを肯定し支持する諸論文を見出すことができた。

このことをふまえて今後取り組むべき課題は、ごみ対応や掃除をめぐってマネジメント・サイクルが展開する様子を具体的な事例をとりあげて考察すること、ならびにその過程でごみ対応や掃除を行う人々が欲求充足し目標達成する様子を考察することである。

[注]

- 1) A. H. マズロー (小口忠彦訳) 『[改訂新版] 人間性の心理学』、産業能率大学出版部、1987 年。
- 2) 「ごみ」について限定しておこう。通常、「生活または事業活動に伴って発生する不要の固形物」を「ごみ」という(『大日本百科全書』、小学館、1986 年)。これを、廃棄物のなかに、取り扱い方法に即して位置づけると次のようである(小島紀徳ほか編『ごみの百科事典』、丸善、2003 年)。



本稿で対象とするのは、生活系ごみまたは家庭ごみと呼ばれる廃棄物である。これらは、大きさや形状によって、あるいは処分方法によって、粗大ごみ、不燃ごみ、可燃ごみ、資源ごみなどと呼ばれる。

- 3) 日本家庭科教育学会は、小学校・中学校・高等学校で家庭科を担当する教員、大学等で家政学や家庭科教育学を担当する研究者、あるいは教育行政の担当者など、広く家庭科教育に関心をもつ人びとが参加している。1958年に発足し、2009年現在の正会員は約1,000名である。
- 4) 環境省『平成23年版環境白書』、日経印刷、2011年。
- 5) たとえば、本稿の冒頭でふれた「計画」「自己実現」などの意思決定や欲求(目標展開)を表す言葉は、第2象限に位置する。